

# 神秘哲学Ⅲ

騎士にして諸々の法学部門の博士、神聖ローマ帝国皇帝顧問<sup>1)</sup>、特権裁判所判事、  
著名なるヘンリー・コルネリウス・アグリッパ 著

能 木 敬 次 (訳)

## 第一部 自然魔術

### 第一章

いかにして魔術が三層世界から諸徳質<sup>2)</sup>を収集するかはこの三部作の中で明らかにされる。

三層世界（元素界・天体界・知性界）を見渡すと、どの下位者も上位者によって支配され、その徳質の影響を受けている。それゆえ、あらゆるものの始源である「主」たる「動者」<sup>3)</sup>は天使・天界・星辰・元素・動物・植物・金属・岩石を経て自己自身から全能なる徳質をわれわれ人間へと引き渡すのである。われわれ人間の為に全能者はこれら全てのことを成し、全てのものを造ったのである。われわれが（神が為されたのと）同じ過程を通して各々の世界を抜け、まさに同じ始源的な世界、あらゆるものの創造者、つまり全てのものの存在の根拠である第一因へと昇ることは可能であることを、賢明な人物であるならば非合理的な言い方で誤魔化すことは出来ない。また、われわれ人間はこれらの物の中ですでに秀逸な物の中だけに存在する徳質だけでなく、他の徳質をも享受することが出来、また天界から新たな徳質を引き出すことも可能である。それゆえ人間は、物理学や自然物の様々な混淆の中にある自然哲学の助けを借りて、また星辰界の光体とその影響力を借りて、天

文学者の法則、数学者の公理に則って、加うるにその法則・公理に対する星辰界の特質をもって元素界の徳質を探索するのである。さらにわれわれ人間はこれらの徳質を種々の知性の力と宗教の聖なる儀式をもって確認する。これら全ての徳質の序列と過程についてはこの三部作の中で明らかにしたいと思う。第一部は自然魔術、第二部は天界魔術、第三部は魔術儀式である。しかし、この判断力も知識も未熟な私が、それもこの若さでこのような困難で、難解で、複雑な仕事を自信たっぷり企てることが許されない出しゃばりではないのかと思案している。それゆえ、ここにあるものは全て、またこれから私によって語られるものはどれもカトリック教会とその信者の会衆の承認を超えて誰にも同意させたくないし、また私自身も同意するつもりはない。

## 第二章

魔術とは何か。その諸分野とは何か。そしてその専門家たちはどんな資格を持たねばならないのか。

魔術は驚くべき徳質を持った部門である。それは最高度の神秘に満ちており、最も神秘的な事物の最も深遠な思想を含み持ち、自然・力・資質・実体とその徳質・全自然の知識——これら全てと結びついている。そして魔術はそれらの中での差異と一致についてわれわれに教えてくれる。そこでは優位体の力と徳質によるそれに対応した劣位体への応用・合一・編入を通した諸物の徳質の結合によって驚異的な効果をもたらす。これは完全で最高の科学である。崇高で神聖な哲学である。あらゆる卓越した哲学の中で絶対的な完成をみせる哲学である。あらゆる正当な哲学は自然哲学・数理哲学・神学に分けられる。自然哲学とは世界の中にあるものの特質（nature）を教えるものである。その発生原因・効果・時期・場所・種類・事象・その全体像と部分を探究する学問である。つまり、

元素と呼ばれるもの数は、特質（nature）は何か、

— 火と土と水を造り出すもの —

そこから天空が生まれ、

そこから潮と虹が陽気な色彩を帯びて生まれた。

雲はどのようにして雷鳴をつくるか、

予期せぬ雷光はどのようにして暗いエーテルの中を彷徨うか、

夜の炎と彗星はどのようにして出現するか、

どのような盲目の力が大地を内側から揺すめるのか、

金と諸金属の種はどこに探し求めればよいのか、

自然の金属はどんな徳質（virtues）と富を持っているのか。

自然の観察者である自然哲学はこれら全てを為し、またそれをわれわれに教えてくれる。ヴェルギリウスの詩には

そこからあらゆるものが流出する。—

そこから人間と獣が、火と雨と雪が生まれる。

そこから地震が生まれる。なにゆえに大洋は

大地の堤を撃ち、そして再び引き下がるのか。

そこから草木の力が、野獣の勇気と怒りが、

あらゆる種類の石、土地を這いずる者たちが生まれる。

数理哲学は（元素界・天体界・知性界といった）三次元の世界に展開し、天体の動きと運行を表す自然物体の数をわれわれに教えてくれる。

まるで急き立てられたかのように

何がいったい輝ける星々をそんなに早く運行させるのか、

何がいったい月や太陽をも時にその顔を伏せさせるのか、

まるで恥辱を受けたかのように。

そしてヴェルギリウスが謳っているように

太陽はいかにして黄道帯の十二の徴を秩序づけているのか。  
導線で楕円に整えられた球体軌道、  
それは天界の恒星の進む道を明らかにする。  
太陽と月の不思議な食、  
ヒアデス星雲、つまり雨の星々、  
七連星、つまり北斗七星を学べ。  
冬の陽はなにゆえにそんなに早く西へ傾くのか。  
どういうわけで冬の夜はそんなに長いのか。

これら全ては数理哲学で解明される。

それゆえ、われわれは天体の動きによって予見することが出来る、  
あらゆる季節を、刈り入れと種まきの時節を、  
それらをいつ始めるのが最適なのかを、  
いつ戦を始め、いつ静かに眠るべきなのかを、  
いつ木を掘り起こし、またいつ埋め戻すべきかを、  
それら全てが実を結べるように。

さて今度は神学である。この学問が教えるのは神とは何か、精神とは何か、  
英知とは何か、天使とは何か、悪魔とは何か、魂とは何か、宗教とは何かで  
ある。聖なる教え、儀式、寺院、観想、そして聖なる神秘、これらがいった  
い何なのかを教える。それはまた信仰、奇蹟、言葉と印の力、秘儀と印符の  
神秘について教える。そしてアプレイウス<sup>4)</sup>が言うように、神学はわれわれ  
に宗教儀礼、宗教慣習・規則を正しく理解し、精通すべく教えてくれる。し  
かし、話をもとに戻そう。

魔術はこれら三つの部門④を理解し、統一し、執り行うものである。それゆえ魔術は古代人によって当然のように最も気高い、最も聖なる哲学と考えられていた。われわれが知る限りでは、魔術は最も賢明なる知識人、最も著名なる著作者たち②によって明らかなものとされた。彼らの中でもザモルクシス (Zamolxis)、ゾロアスターが傑出しているので、二人はこの科学の創始者であると多くの人々に信じられている。彼らの跡を極北の住人アッパリス (Abbaris) とカルモンダス (Charmondas)、ダミゲロン (Damigeron)、エウドクサス (Eudoxus)、ヘルミップス (Hermippus) が続く。他にも傑出した第一人者としてメルクリウス (Mercurius)、トリスメギストス (Tresmegistus)、ポルピュリオス (Porphyrius)、イアンプリコス (Iamblicus)、プロティノス (Plotinus)、プロクロス (Proclus)、ダルダノス (Dardanus)、トラキア人のオルフェウス (Orpheus)、ギリシア人のゴグ (Gog)、バビロニア人のゲルマ (Germa)、ティアナのアポロニウス (Apollonius) などが挙げられる<sup>9)</sup>。オスタネスもまた魔術について傑出したものを書いた。それらはいわゆる散逸してしまったが、アブデラのデモクリトスがそれらを掘り起こし、注釈をつけて公にしている。その他、ピタゴラス、エンペドクレス、デモクリトス、プラトンや他の多くの有名な哲学者たちがこの学問を学ぶために海を渡ってはるか遠くへと旅をした。そして帰国しては驚嘆すべき熱意をもってその成果を出版し、偉大な神秘として後世に伝えた。また、ピタゴラスやプラトンは魔術を学びにメンフィスの預言者たちの許へと向かい、シリアやエジプト、ユダヤ領、カルデアンの諸学派のほとんどを経巡って行ったことはよく知られている。それゆえ彼らは最も神聖な記念碑や魔術の記録について知り、その秘法を身につけていたかもしれない。

よってこの学問を探究したいと思う者は誰でも、自然哲学 [ここでは諸物の特性が明らかにされ、あらゆる存在の隠された特質が見出される]、そして数学と星位・星座 [諸物の崇高な徳質・特性がそれに依拠している]、神学 [それはあらゆる事物を配列し、支配する非物質的実体を明らかにする]、

これら三つの学問に無知であったり、またそれらに十分に精通していなければ、おそらく魔術の合理性を理解出来ないであろう。というのも、単に魔術だけによって為される仕事はないからである。単なる魔術的なもの、つまり以上の三つの学問の理解の中にない仕事はないからである。

“HAHN & WHITEHEAD 社” 版 原注

- ① 自然科学、数理科学（数学）、神学を指す。
- ② 著者はここで西暦1509年までに至る著作家・教師の貴重なりストを挙げている。

この時点ではアグリッパはフランスのドールで神学の教師を務めていた。そこでの彼の講義は多くの人々の注目を浴びたが、当地の修道士たちへの彼の辛辣な皮肉が彼自身への個人的な嫌悪感情を招来した。彼は異端の誹りを受けてケルンへと逃れざるを得なかった。

### 第三章

四つの元素、その特性 及び その混合体について

四つの元素がある。それらはあらゆる物質の元素 — 火・土・水・空気 — である。そこからあらゆる元素的下位体が合成される、それもそれらをただ積み上げるだけでなく、融合・結合によって。そしてそれらが分解されれば、また元素へと戻る。というのも感覚的なもので純粋なものではなく、それらは多少とも混合しており、相互に入れ替え可能であるからである。土が汚濁し、分解すれば水となり、水が濃くなり、固くなれば土となる。しかし熱によって蒸発すれば空気となる。そして燃やされれば火となる。そしてその混合物が消されるとまた空気へ戻る。しかしその空気が燃焼の後、また冷やされると土、もしくは石、硫黄となる。このことは光を当てると露わに

なる。プラトンもまたこの見解をとっていた。つまり土は全く不変的であるが<sup>6)</sup>、他の元素は常に相互に変転が可能である。しかし、ごく少数の哲学者は、不変であるが他の元素と和合し、また分解されること、そしてまた再び土に戻るという見解をとっている。<sup>③</sup>さて元素は各々二つの特性を持っている。つまり、前者は上位体としてそれ自身で完結し、後者は下位体としてそれに続く元素と結合する。例えば、火は熱く乾燥している。土は乾燥して冷たい。水は冷たく湿っている。空気は湿って暖かい。<sup>④</sup>このようにして諸元素は二つの対照的な特性に従い、元素間もまた互いに対照的な位置にある、火に対する水、土に対する空気というように。さらに四元素は相互に対照的な元素の根拠ともなっている。例えば、土と水は重く、空気と火は軽い。それゆえ、ストア派は土と水を受動的、空気と火を能動的と呼んだ。かつてプラトンもまたそれらを別のやりかたで区分し、各々に三つの特性を振り分けた。つまり、火には明るさと薄さと動きを、土には暗さと厚さと静けさを特性として示した。そしてこれらの特性によると火の特性と土の特性は対照的である。しかし、他の元素は火と土の元素の特性を借り受けている。それゆえ、空気は火の二つの特性（薄さと動き）、土の特性の一つ、つまり暗さを借り受けている。同じように、水もまた土の二つの特性、つまり暗さと厚さ、そして火の特性の一つである動きを借り受けている。しかし、火は空気よりも二倍薄く、三倍可動的であり、四倍鋭い。空気は水よりも二倍鋭く、三倍薄く、四倍可動的である。また水は土よりも二倍鋭く、三倍薄く、四倍可動的である。<sup>⑤</sup>このようにして火は空気に対置し、空気は水に対置する。水が土に対置するように土は水に対置する。同様に水が空気に対置するように空気は火に対置する。この構図はあらゆる物体・自然物・美徳<sup>7)</sup>・驚嘆に値する作品の根拠であり基礎である。そしてこれらの諸元素とその融合体の特性について知る者は、驚異的な驚嘆に値するものを創り出すことが可能であり、魔術について完全に精通している者である。

原注

③ アグリッパはこの章と次の章でこれについて説明を加えている。つまり、いかに元素がその姿を変えようとも実体は不変であること、それゆえ神が無から全てを造り給うたという教義を否定した。

④ [元素対照表]

	上位体特性	下位体特性
火……	熱い	乾燥した
土……	乾燥した	冷たい
水……	冷たい	湿気のある
空気…	湿気のある	熱い

これらの特性について言えば、火は水に対置し、土は空気に対置している。占星術家はこの説明に留意すべきである。と言うのも、かれらの書物は同じ元素について扱っているのに、上位体・下位体の特性については何ら言及がなされていないからである。

⑤ 原注④にある四つの元素間の対照表を参照されたい。

## 第四章

### 四元素の三層思考について

上述したように四つの元素は、それらに関する完全な知識なくしては魔術において何の効果も得られない。それらの元素の各々は三層構造を成している。つまり、四つの元素が三つの層を成しているので都合十二の要素を形成していることになる。七段階から十段階に入る時、崇高な結合への過程がは

じまる。そこであらゆる美德 (virtue) と驚嘆すべき操作がとり行われる。純粹な元素は第一階層に属する。それは複合と変容、並びに混合を許さない。それゆえ腐敗せず、また腐敗物でもない。それを通してあらゆる自然物の徳質 (virtues) が発現する。この徳質を明らかにすることは誰も出来ない。と言うのも、あらゆる事物はそれ自身、あらゆる事物の徳質に依拠しているからである。この徳質を知らなければ、誰も驚嘆すべき徳質の段階へと進むことは出来ない。第二段階に属するのは複合し、変容し、それゆえ純粹でない元素である。しかしこれらは人為的操作によって純粹な単純性へ帰納させることが可能である。そういった操作を経ることによって、単純性の徳質はとりわけあらゆる秘められた・共通の自然の操作を完全なものとする。これらの徳質は全自然魔術の基礎である。第三の階層に属するものはもともとそれ自身元素ではない。それらは二重に複合したものであり、多様であり、他の元素と可変的な関係にある。⑥それらは不可謬な媒体であり、それゆえ、中間自然とか、中間自然の魂と呼ばれるものである。その深遠な神秘を理解している者はほとんどいない。この段階の元素に属するものは、一定の数・程度・位階によって自然界のもの、天界のもの、超天界のもの、どれであれ各々の効果を完成させることが出来る。それらは驚異と神秘に満ちている。そしてそれらは自然魔術においても神聖魔術においても操作が可能である。というのも、これらの魔術から、これらの魔術を通してあらゆる物の結合と崩壊・移行の過程が進行し、来るべきあらゆる物の知得と予見、悪の駆逐と善霊の獲得が進行するからである。それゆえ、これらの元素の三層の徳質とそれに関する知識なくしては魔術と自然の隠された学問において何がしかの仕事を為すことが出来るなど考えてはならない。しかし、一つの位階のものを別の位階へと復位させること、不純なものを純粹なものへ、複合したものを単純なものへと復位させることを知っている者は、また実体を分割せずにそれらの性質・徳質・効能 (power) を数・程度・位階に応じて直接知る者は、あらゆる自然物・天界の秘密の完全な操作・知識を容易に得ることが出来るであろう。

## 原注

- ⑥ これらつまり「熱・光・電気」であり、「天界の磁気・牽引力・震動」、「形・数・色」、「自然法則の秘められた原理」、「時間・空間・実体の普遍的な属性」である。

## 第五章

## 火・土の驚嘆すべき特性について

ヘルメスが言うには、あらゆる驚嘆すべきものの操作にとって十分な効力を持つものに二つの元素がある。それは火と土である。火は能動的であり、土は受動的である。ディオニシオスが言うように、火はあらゆる物にあって、あらゆる物を通して発現し、そして消え去る。それは全ての物の中で光輝いているが、同時に秘められてとり、未知なままである。火がその本来の本性にある時、（他のどんな物も火の適切な働きを明らかにする特性へと至ることはないが）それは際限がなく、目に見えない。火はそれに適したどんな働きに対しても十分な効力を示す。火は可動的であり、火と類縁性のあるあらゆる物の特性に対応する。火は自然を再生し、そして守る。火は事物を明らかにする。しかし火に従う光によっては理解できない。それは明るく、分割可能で、反射し、上昇し、素早く動き、はるか高みにまで達し、常に変容を引き起こし、他者を理解するが己については決して理解されることはない。他者の助けを必要とせず、密かに自己を増殖する。火はそれを受け入れるものに対してその偉大さを開示する。火は活発であり、力強く、あらゆる物の中にあるが、すぐには見えない。火は他に対抗・対立することはないが、謂わば復讐の具でもある。火は突然、事物を収斂させて己へと服従させる。火は理解不能であり、接触不能である。消滅させることは不可能で、己をあらゆる物にふんだんに分与する。プリニウスが言うように火は事物の特性の中

で際限のない、いたずら好きな部分である。火があらゆる物を破壊するのか、それとも生産するのか、それは問題である。ピタゴラス学派の人たちが言うように、火それ自身は一つである。火はあらゆるものを貫き、天界まで拡がり、光輝く。しかし、地獄界では火は窮迫し、暗く、苦悩している。その中間地帯では、火は双方の特性を持つ。それゆえ、火はそれ自身においては一つであるが、火は火を受容するという観点において、火は多様である。キケロの散文集にあるクレアンテスの言説によれば、様々な特性において火は様々なやり方で分配されている。それゆえ、われわれが使っている火は他の物たちから取り寄せられているのである。それは石の中にある。また、鋼鉄を叩くと取り出される。火は大地の中にある。火は大地を造る。土を掘ると煙をたてる。火は水の中にある。温泉や湯の出る池がそうである。火は海の底にある。そして海を造っている。風によって持ち上げられると水は温かくなる。火は空気の中にある。そしてしばしば見かけるように風を燃やす。また、あらゆる動物、あらゆる生き物、あらゆる植物も含めて、それがどんなものであっても熱によって保持されている。生きとし生けるもの全てはこの閉ざされた熱によって生かされているのである。上述した火の特性は熱である。熱はあらゆるものに実りと光を与え、あらゆるものに生命を与える。地獄の業火の特性はあらゆるものをなめ尽くし焼き焦がす熱であり、あらゆるものを不毛なものとする暗闇である。天界の明るい炎は暗闇のあらゆる霊を追い払う。これはまた、われわれの火は木で熾されているが、それに類似したもの全てを追い払う。それは崇高な光の乗り物である。「私は世界の光である」と語る者についても同様である。それは真の火であり、光の父である。そこから所与のあらゆる善きものが出てくるのである。光の父はその火の光を前進させ、それをまずは太陽と残余の天体へとつなげる。そしてこれらを媒介物としてその光をわれわれの火の中へと運び入れるのである。それゆえ、闇の霊たちが暗闇の中でより強い時、光の天使である善なる霊たちは神の光、太陽や天界の光だけでなく、われわれが遍く保持する火の光によって増大する。それゆえ、宗教と儀式を始めた最も賢明な指導者たちは、祈祷や歌・聖

なる崇拜のあらゆる手法は、どんなものでも火を灯した蠟燭や松明なしでは執り行つてはならないと取り決めた。それゆえまた、ピタゴラス学派の意味深い言葉に「光なくしては神のことを語るな」というのがある。彼らはまた邪悪な霊を追い払うために明かりと炎が死者の屍によって燈されねばならないとした。聖なる処方によって死者の罪が償われ、埋葬に付されるまでは明かりを消してはならないとされた。また古い律法の中で偉大なるエホバが自らこう語っている、神へのあらゆる生贄は火とともに供されねばならない、火は常に祭壇に燈されていなければならない、と。この習慣を祭壇を預かる司祭は常に保ち、ローマ人たちの間にあっても守り通した。

さて、あらゆる元素の基礎となる要素は土である。それは目的であり、主体であり、あらゆる天界の光線とその影響の受容体である。その中にはあらゆる物の種と種子となる徳質（virtues）が含まれている。それゆえ土は動物・植物・鉱物となる。土は他の元素や天界物と合体して実り豊かなものとなる。土はあらゆる物の中心物であり、基礎であり、母である。土を好きなだけ取るがいい。分けたり、洗ったり、浄化したり、細かく砕いたりしても、しばらくの間、空気に晒しておけば、天界の徳質で満ち溢れ、そこから植物や虫たちが生まれ出てくる。石や金属の明るい閃光も出てくる。もし火の助けを借りて純化され、簡易な洗浄によって単純体へと還元されれば、そこに偉大な神秘が隠されているのが分かるだろう。それはわれわれの創造の始めのものであり、われわれの力を回復させ、保持させる真の薬である。

## 第六章

### 水と空気と風の驚嘆すべき特性について

他の二つの要素、つまり水と空気は土以上の効力をもつ。自然はそれらの中に少なからずの驚異的な事物の作用を含み持つ。水なくしてはどんな物も生きてゆくことは出来ない。どんな草木・植物であれ、水の湿気なくしては

枝葉を拡げることは出来ない。水の中にはあらゆる物の、特に動物の種子としての徳質がある。木々や植物の種もまた、それらは土中にあるのだが、実をつける前に水の中で腐らせる必要がある。それらの種子が土の湿り気を吸収するにせよ、霧や雨、もしくは意図的に与えられた水を吸収するにせよ、どちらにせよそういう操作が事前が必要とする。モーゼが記しているように、土と水だけが生ける魂を生み出すのである。彼は諸物の二層生産を、つまり水の中で泳ぐものと地上の上空で飛ぶものの生産物を水に帰している。しかも土の中と上でなされる生産物の一部はまさに水の特性に帰することが出来る。同じ創世記の中に、「神が地上に雨を降らせなかったので、植物・草木は育たなかった」とある。水の要素の効能はこのように顕著なので、キリスト自身がニコデムス<sup>8)</sup>に施したように、水なくしては靈的再生はなされ得ない。また、神の崇拜・罪の償い・浄化の儀式において水の徳質は顕著である。実に水の必要性は火以上のものがある。その効用は不確定であり、その利用法は多様であるが、その徳質によってあらゆる物が生存し、生産され、育まれ、増大する。それゆえ、ミレトスのターレースとヘシオドスは、水は万物の始めであるとした。水はあらゆる元素の始めのものであり、他の全てのもので支配するがゆえに最大の可能態であるとした。プリニウスは、水は大地を呑み込み、炎を消し、天の高みへと立ち昇り、雲を押し上げることによって天界を己のものにしようとする、と言った。水が落下すれば大地で育つあらゆるもの原因となる。プリニウスやソリノウス (Solinus)<sup>9)</sup>の記述、及び他の多くの歴史家による水の驚嘆すべき徳質に関する記述によれば、水によって作り出される驚異には夥しいものがある。オヴィディウスは彼の著書<sup>10)</sup>の中でこう述べている。

角をしたためた太陽神ジュピター (Hammon) は

正午には冷たく、夜明けと夕方には熱い。

泡立つアタマスの水に浸けられた木は燃え上がる。

その時、月は太陽はるか遠くへと退く。

キネコスケイネコスの川から水を飲む者は  
その内臓は石となり、胴体は大理石で覆われる。  
山々から流れ下るクラキス川とシバリス川は  
人の髪を琥珀色や純金色に染める。  
さらに驚くべきことには、泉の中には  
人の身体だけでなく、精神をも変えるものがある。  
穢らわしいサルマキス<sup>11)</sup>について聞き及ばない者があろうか。  
エチオピアの湖について聞いているか。  
この水を飲んだ者は誰でも正気を失うか、  
直ちに死んだような眠りにつく。  
クリトリウスの泉で喉の渴きを癒す者は  
葡萄酒を嫌い、禁酒家となり、ただ真水だけを愛するようになる。  
リンケストゥス川の水の効果は今までに述べた水のものとは異なる。  
この水を飲みすぎれば  
酔っぱらいのようによろめき歩くことになる。  
美しいアルカディア地方にある湖、それは昔はペネウスと呼ばれていた。  
ここの水には二つの特徴があるとされている。  
その水を夜に飲むと恐れと我慢の心が芽生える。  
夜に飲むと害があり、昼に飲むと無害なのだ。

ヨゼフもまたシリアのアルケアとラファネラの間にある川の特異な性質について述べている。この川は安息日には水路に満々と水を湛え、その後まるで泉が涸れたように突然、流れを止める。残りの六日間、あなたは靴を濡らすことなく川を渡ることが出来ることだろう。しかし、再び七日目になると（その理由は誰にも分らないが）、水は以前と同じように豊かな流れを取り戻す。それゆえ、近隣の住民は、その川をユダヤ人にとって神聖な七番目の日にちなんで安息日の川と呼んだ。福音書もまたある羊の水飲み場について証言している。その水が天使によって波立たされた後、最初に足を踏み入れ

た者は誰でも、かつて罹ったあらゆる病気が治るのである。これと同じ徳質と効力がヨニアの水の精の泉にある。それはエリス市の所領地に属するキテロン川の近くのヘラクレアと呼ばれる村にある。病気をもった人がこの泉に足を入れると誰でもその泉から出たら全ての病気が治っている。パウザニアスが報告するところによると、アルカディアの山であるリュケーウスにアグリアと呼ばれる泉があった。その地方に旱魃が起り、果実の実りを脅かすたびにジュピター神の司祭が泉のもとへ行った。司祭は犠牲の供物を行い、泉の水に心をこめて祈り、手に櫛の枝を持ってそれを空になった泉の底へ押し当てた。すると水が湧き立ち、そこから蒸気が空中へと立ち昇り、雲の中へと消えていった。雲は蒸気と交わり、天空を覆った。すると間もなくそれは雨となり、国の全土に降り注いだ。さらには他の多くの著作者の中に、水の驚異について不思議なことを記した人がある。彼はエフェソスの医者ルフスであるが、彼は他の著作者には見られない不思議なことを書き残している。

最後に空気について述べなければならない。これは生きた霊であり、あらゆるものをめぐり、あらゆるものに生命を与える。あらゆるものを結びつけ、移ろわせ、そして満たす。そうしたことからヘブライ人の医者たちは風を元素の中に数え上げず、風を媒体・接合剤と見做している。全てのものを結合させ、世界機関を再生する霊と見做している。風はあらゆる天体の影響をすぐさま自己の中に取り込み、それを他の元素やあらゆる元素の混合体へと伝える。また、風は神聖な姿見鏡であるかのように、自然のものであれ、人工のものであれ、あらゆるものの種とあらゆる種類の言語を自己の中に取り込み、それを保持する。そして風はそれらを運んで人間や他の動物の中へと毛穴を通して移し入れ、彼らが寝ている時も起きている時もぼんやりとした印象を与える。そして様々な奇妙な夢や預言を与える。それゆえ、人が殺された場所とか、獣の死体が新たに隠された場所を通りがかった人は恐怖に襲われると言われている。というものの、その場所の空気は殺人の恐ろしい種が満ち溢れており、それを吸い込めばその種によって人間の霊は揺り動かされ、面倒な目に遭うからである。そして不安な気分になるのである。という

のも、突然な印象を与えるもの全ては自然を脅かすからである。それゆえ、多くの哲学者たちはこういった見解を持っている、つまり空気は夢や他の多くの魂によって与えられる印象の原因である、と。その印象は様々な心像や似像、形姿（それらは事物や人間の言葉から剥がれ落ち、まさに空気の中で増幅されるのであるが、）を通して感覚・幻想へと至る。そしてそれらを受け取った人間精神は気苦勞から解放され、他の何ものからも邪魔されることなく、特定の形姿と出会うことを望みながらその形姿によって思念を与えられるのである。諸物の形姿に関しては、その独自の性質から人間の諸感覚へと運ばれる。しかし、一般の動物の形姿は空中にある時、天界の印章を受ける。こういったことから、形姿を受ける側の能力や特質によって、ある特定の形姿が特定の感覚の許へと受け入れられるのである。それゆえ、当然のように迷信や亡霊の仕業によることなく、人間は遠く見知らぬ所にいる別人に彼の心の内をあっという間に送ることが出来るのである。その時間の長さについては正確に計ることは出来ないけれども、それは24時間以内のことであるはずだ。私自身その術を知っている。また、しばしばそれを試してきた。⑦かつて司教トリテミウスも同様の知識を持ち、それを試みている。ある特定の形姿は、それが靈的なものであれ、自然のものであれ、事物から流れ出る。⑤（それは謂わばある物体から別の物体へ流れる際、空中でその力を増す。）その形姿は光や動きを通してわれわれの眼前や他の感覚に己の姿を示す。それはプロティノスが教示しているように時として驚異的な働きをわれわれに示す。

#### 原注 ⑦

これはテレパシーや心象の転移が何百年も前から知られ実践されてきたことの決定的な証拠である。心象転移の方法はしばしば当事者が無意識の中に様々なやり方で実行される。二人の人間が互いに自然な共同感情の中にある時、彼らの神経が高ぶり、敏感な状態にあれば比較的簡単に行われ得る。一つの方法として、手紙を書き、

それを焼く。それから心を宛先の人物へ集中し、手紙の返事が欲しいと願う術がある。掌をガラスの上に拡げてガラスの水差しをイメージする。一方でその場にはいない人をはっきりと思い浮かべる。それから水を川か海へ流す。そうすると海へその人へのメッセージを送ることとなる。石・金属の板もしくは破片を表面にメッセージを書き込んで地中に埋める、それも新月の日に。そうすると地下で働く者や金属関係で働く者に影響を与える。特に土星や天王星が太陽を通して地球に強力な側面を発揮するときには尚更である。空気法は最上の方法である。アグリッパがこの箇所ですべてのように、空気法は彼によって用いられたに違いない。つまり、まず、戸外に出る。もしくは開け放たれた窓辺に立つ。そして思念する人物のいる方角へ向く。もしその人が何所にいるか分からない場合は、四つの基本点（東西南北のことか、訳者注）へ順に向かう。そして話をしたい人の名前をはっきりと声に出して呼ぶ。ちょうど相手が隣接する部屋の中にいるかのように、三度、心をこめて、呼ぶたびに声を高めて。このように相手の名前を呼びながら訴えかけ、両腕・両手を拡げる。心の中で相手の姿を明瞭に思い浮かべながら、あなたの呼ぶ声が聞こえるように決然と繰り返し呼びかける。それからその人が目の前にいるかのように簡潔に、はっきりと、決然として語る。このことを終えると、今度は聞き耳をたてて、あたかも耳を使わずに人があなたの心に話しかけるかのように応えが返ってくるのを待つ。対話の役に立たず、むしろ妨げになるような応答をイメージしてはならない。勿論、ほとんどの場合、相手との間にある種の共感・絆があることが必要である。この種の技法は練習によって特に愛情関係にある者たちの間で飛躍的に改善される。そのような改善には一定の時間が必要だろう。練習によって心による伝達手法が完成すれば、言葉によるメッセージや他の重要な条件は免除されるであろう。その時には天界のメッセージを投影する意志と思考のみが必要とされることだろう。

原注 ⑧ 「物質体から天界体へ」という意味。

南風によって空気が薄雲へと濃縮され、そこでは姿見のように遠くの城や山々、人馬や諸々の姿が反射し映るのが見える。雲が去ればそれらはやがて消える。アリストテレスは『メテオール』（天空に関する著作）の中で、虹はちょうど姿見のように雲（空気の濃縮態）に映し出されると言っている。アルベルトゥスも、事物の表出が事物そのものの中で成されるのと同じように、諸物の像は自然の力によって湿った空気の中で容易に表出され得る、と言っている。アリストテレスはまたある男のことについて語っている。彼は弱視のために、かれの近くにある空気があたかも姿見のように対峙するようになったこと、視覚光線が彼の方へと反射して突き抜けていかず、彼が行く所は何処でも彼自身に思い浮かんだ像がいつも彼の顔の正面にあって彼の前を進んでいると考えた。このようなある種の姿見の人工性によって姿見とは他のわれわれが喜ばしいと思う像が空中の一定の離れた距離の中で造られるのである。人がその見ている物の意味が分らない時、彼らは靈魂が現れたと思うのである。実際はそれらは彼ら自身の生命を持たない鏡像にすぎないのである。そしてこれは有名な事象であるが、何の光もない場所で、太陽の光がほんの小さな穴から差し込んでいる。白い紙か平たい姿見がその光に向かって立てられる。そうするとその板上には外の太陽の光の下で起こるあらゆるものが見えるのである。もっと鮮やかな手品・トリックがある。人工的に色づけされた画像もしくは紙面に書かれた文字を取り出し、雲のない夜、満月の光に向けてそれを立てる。すると紙に書かれたその似像が空中で増幅され、上方へと持ち上げられ、月の光とともに反射する。そういった事情を知っている者は誰でもそれらの画像を遠くにあっても月の円周の中で見て、そこに映された内容を読み、知ることが出来るのである。隠された神秘を明らかにするこの種の魔術（Art）は敵に包囲された町や都市にとって実際に有益である。これはかつてピタゴラスが長きに亘って実践してきたものであ

る。近年でもこの知識を持っているものは私を除いては僅かな者に限られる。そしてこれら全てのもの、また多くのこれらより偉大なものがまさに空気の特性に根拠づけられている。その理由・原因は数学と光学によって明らかにされる。これらの似像が空中の光景に反射するように、時としてそれが聴覚に反映することもある、ちょうどエコーにおいて明らかのように。しかしこれら以上に隠された術がある。それによって誰でも他のもののはるか遠くで話したり、そっと囁いたりたことを理解することが出来るのである。

空気の要素の中にはまた風もある。というのも風はまさに動かされ、掻き上げられた空気であるからだ。これらの中で主要なものは四つある。それらは天の四つの方角から吹き寄せる。つまり南風のノートゥス (Notus)、北風のボレアス (Boreas)、西風のゼフィルス (Zephyrus)、東風のエウルス (Eurus) である。<sup>⑨</sup>これらについてはポンタヌスがいかの詩節でまとめて説明している。

オリンポスの頂きから冷たいボレアスが吹き、  
その底からは湿ったノートゥス流れ来る。  
陽が沈む処よりゼフィルスが、陽の出の方角よりエウルスが飛来する。

#### 原注 ⑨

アウグスティヌス時代の人で、『天文学』という題の詩の作者であるローマのマルクス・マニリウス<sup>12)</sup>はこの四つの風について書いている。それについては『マニリウスの五書』(ロンドン、1697年)というのがある。以下はその詩句である。

東と西と北と南、  
これらの方位は互いに向き合い、世界を分ける。  
これらの四方位から多くの風が飛び来たり、  
空虚な空を駆け抜け、戦い、騒ぎ立てる。

北風の荒ぶるボレアスは氷と雪をもたらし、  
東からは優しいエウルスが吹き来る。  
炎熱の南からアウスター（乾いた風）が投げ込まれ、  
心地よいゼフィルスが沈みゆく太陽を冷やす。

ノートゥスは南風である。雲を伴い、湿り気があり、温かく、そして体に  
良くない。ヒエロニムス<sup>13)</sup>はこの風を雨の執事を呼んでいる。オヴィディウ  
スはこう叙述している。

濡れた翼で南風が飛び立ち、  
その恐ろしい姿を瀝青色の雲で覆う。  
白髪の河は流れ、雨で膨れ上がった頬髭は重たく垂れこめる。  
霧がその額を囲み、その胸と翼から雨が滴る。

ボレアスはノートゥスの反対である。ボレアスは北風であり、激しくさかま  
き、雲を掻き立てる。空気を澄ませ、水と氷を結びつける。オヴィディウス  
はボレアスを語るのに自分自身を持ち出している。

力は俺に与えられている。この厚い雲を俺は追い払う。  
大波を鞭打ち、節くれだった樫の木を引き回す。  
柔らかな雪を凍らせ、大地を雹で叩きのめす。  
俺が大空で仲間を手に入れようとする時は、  
（というのも、そこが俺たちの領分だから）  
俺たちは激しく戦う。  
俺たちに立ち向かう岩と雷鳴轟かす空、  
雲打つ雷光は天の高みから光を投げ降ろす。  
大地の裂け目を駆け抜けて俺は飛び、  
虚ろな洞穴へと大地を押しつける。  
亡霊を震えあがらせ、大地を揺るがす。

西風のゼフィルスは最も穏やかで、心地よいそよ風とともに西から吹き寄せる。それは冷たく、湿気を運び、冬の効果を取り去る。そして枝々や花々をもたらず。エウルスはこれとは正反対である。それは東風でアペリオテス<sup>14)</sup>と呼ばれる。それは水気を運び、雲をわき起こし、嵐を呼び起こす。オヴィディウスはこの二つの風について詩っている。

エウルスは朝の曙光へと、ナバタエの地へ、  
 ペルシア、朝焼けの下の光輝く地へと退く。  
 夕べになると岸边は沈みゆく太陽に照り輝き、  
 ゼフィルスが忍び寄る。  
 恐ろしいボアレスはスキティアと北斗七星を襲い、  
 これに向う大地を南風は  
 実り豊かな雨といつも泣きはらすような雲で浸す。

## 付 記

本稿はヘンリー・コルネリウス・アグリッパ・フォン・ネットスハイムの『神秘哲学』の一部を訳出したものである。(本書は一般には『隠秘哲学』という名称で知られている。底本は以下のとおりである。

The three books of *Occult Philosophy or Magic* by the famous magic Henry Cornelius Agrippa, edited by Willis F. Whitehead, by direction of the brotherhood of magic: the Magic Mirror. Cicago HAHN & WHITEHE 1898.

## 参考文献

- Henrici Cornelii Agrippae: *De Occulta Philosophia Libri Tres*. sine loco 1533: Herausgegeben und erläutert von Karl A. Nowothny, Akademische Druck-u. Verlagsanstalt Graz 1967.
- The three books of *Occult Philosophy*, written by Henry Cornelius Agrippa of Nettesheim. Translated out of the Latin into English tongue by J.F. London: Printed by R.W. for Gregory Moule 1651.
- Cornelius Agrippa: *De Occulta Philosophia Libri Tres*. edited by V. Perrone Compagni, published by E.J. Brill Leiden 1992.

Agrippa von Nettesheim: *Die magische Werke*. Herausgegeben und eingeleitet von Marco Frenschkowsky, Marix Verlag Wiesbaden 2008.

### 訳者注

- 1) カール五世 (1500~1558) のこと。
- 2) Virtues の訳語。
- 3) Worker の訳語。
- 4) アプレウス (Lucius Apleus, c.125-c.180): ラテン語散文家。
- 5) ・ザモルクシス (Zamolxis, 生没年不詳): 古代ギリシア時代の賢者。ピタゴラスの弟子。魂の不死を説き、死後、彼の住んだ地域で守護神として祀られた。
  - ・アップバリス (Abbaris, 生没年不詳): 伝説上の人物。ゼウスの息子とされる。アポロン神殿の神宮。ユーカサス地方で魔術を学んだとされる。
  - ・カルモンダス (Charmondas, 生没年不詳): シシリー島の立法家。ピタゴラスの門下と言われる。自分が制定した法律を犯したために自殺したと言われる。
  - ・ダミゲロン (Damigeron, BC 2 世紀頃): 古代ギリシアの鉱物学者。
  - ・エウドクサス (Eudoxus, B.C.410~B.C.355): 古代ギリシア天文学者・数学者。プラトン門下。著作の全ては散逸している。
  - ・ヘルミップス (Hermippus, 生没年不詳): 喜劇作家。アテネ人。40 の作品を残したと言われる (そのうちの9作が現存)。
  - ・トリスメギストス (Tresmegistus): ヘルメス・トリスメギストスのこと。この人物については諸説ある。1. エジプトの天文の神、2. ピタゴラスの師、3. エジプトの医者・哲学者。ヘルメス文書の著者とされ、賢者の石を手にした唯一の人物と考えられた。
  - ・ポリプユリオス (Porphyrius, A.D.234~c.305): プロティノスの弟子。プロティノスの異端反駁書『エンネアデス』を出版。彼の著作になる『イサゴゲ』(Isagoge) は中世を通して哲学の標準的入門書となった。
  - ・イアンブリコス (Iamblicus, 245~325): シリアの新プラトン主義者。ピタゴラス研究者。
  - ・プロティノス (Plotinus, 205?~270): 新プラトン主義の創設者といわれる。『エンネアデス』の著者。
  - ・プロクロス (Proclus, c.401~485): コンスタンティーノプル生まれ。シリアノス門下。新プラトン主義者。晩年、アカデメイアの学頭となる。
  - ・ダルダノス (Dardanus): ギリシア神話の神。ゼウスとエレクトラの息子。都市ダルダニアの創始者。
  - ・ゴグ (Gog): 旧約聖書「エゼキエル」・「黙示録」の中で語られる神話的人物か。人間と悪魔の間に生まれたとされる。
  - ・ゲルマ (Germa): 現在のところ不明。テキストではバビロニア人とあるので古代バビロニア地方の魔術師か。

- ・ アポロニウス (Appollonius, 生没年不詳)：小アジアのティアナ出身。キリストと同時代の魔術師・預言者といわれた。
  - ・ オスタネス (Osthanes)：紀元前5世紀後半のペルシアのマジ (魔術師)。ペルシア王クセルクセスがギリシアに侵入したときに随伴したと言われる。オリエントの魔術について多くの著作をものしたと言われる。
  - ・ カルディアン諸学派：カルディア典礼カトリック教会。婦一協会、東方典礼カトリック教会とも呼ばれる。中東・イラク方面を管轄する。
- 6) テキストでは「土は完全に可変的である」(the Earth was wholly changeable) とあるが、ラテン語原典 (ライデン版) では *intransmutabilen* (不変的) とある。ドイツ語版訳もライデン版に準拠しているため、本稿も「不変的」と訳した。一般にドイツ語訳の方がラテン語原典を忠実に訳している印象がある。
  - 7) ラテン語原典では *Virtutum* があてられている。
  - 8) ニコデムス (Nicodemus)：キリストと同年代の人物とされる。パリサイ人、古代ユダヤ長老会員。
  - 9) ソリノウス (Solinus, 3世紀中期)：ローマのラテン語文法家・収集家。
  - 10) オヴィディウス (Ovidius, B.C.43～A.D.17)：古代ローマの詩人。
  - 11) サルマキス (Salmacis)：小アジアのハリカルナッスス近郊にある泉の妖精の名前。その泉の水を飲むと同性から愛されるようになるといわれる。
  - 12) マルクス・マニリウス (Marcus Manilius, 紀元1世紀)：古代ローマの詩人、占星術師。
  - 13) ヒエロニムス (Hieronymus, c.340～420)：キリスト教聖職者・哲学者。ラテン語訳聖書ウルガータ訳の翻訳者。
  - 14) アペリオテス (Apeliotes)：東風を司るギリシア神。